出題の意図及び解答例（中国語学分野）

Ⅰ 次の文章は、中国語が近代に至って日本語を経由して西洋諸語から取り入れた“譯名”(翻訳借用語)に関して述べたものです。これを読んで、次の問 1、問 2 に答えなさい。なお、設問の都合上、下線を引いた箇所があります。（配点：140 点）

【出題の意図】

現代中国で最も権威のある中国語史概説書である王力『漢語史稿』から、中国語の近代語彙の成立に際して日本製漢語が果たした役割について述べられた箇所を選んで問題文とした。問 1 では、受験者が問題文の意味を中国語史の基本的知識に立脚して理解できているかどうか、及び中国語の文章を日本語に翻訳する能力が十分にあるかどうかを検査する；問 2 では、中国語の近代語彙の多くが明治期に日本で作られているという良く知られた事実を認識し、その語彙の具体例を挙げられるかどうかを検査する。

問 1

[　]で括った範囲について、全文を日本語に訳しなさい。（配点：100 点）

【解答例】

なぜ中国語と日本語が同じ翻訳借用語を共通に用いることができるのか？それは、日本人が西洋の新しい名詞術語を翻訳する際漢字を用いて翻訳したからである。中国語の要素は日本語の中ではそれほどに根付いたものなのである。漢字は日本において、ほとんどギリシャ語やラテン語の西洋各国におけると同様のものであり、日本語の新語を構成する基礎とすることができた。日本語の中の漢字は、基本的には隋唐代の中国語が借りられていったものである；本当は、日本語の中の漢字こそが中国語由来の借用語なのである。現在、日本人は漢字を用いて新語を構成しており、それらは現代中国語にもちょうどよく役立っている。機械的にただ引き写して、自ら翻訳語を作ろうとしないことはもとより誤りである；けれども、日本製の訳語を殊更に避ける必要もまた無いのである。

問 2

文中の下線部の記述に当てはまる中国語の“新詞”の例を、任意に 5 語挙げなさい。解答は繁体字・簡体字のいずれも可とする。（配点：40 点）

【解答例】

革命、教育、文學、文化、文明、經濟、封建、機械、精神、具體、抽象、社會、哲學、化學、企業、主義、積極、消極、主觀、…（以上は一例であり他の語を挙げていてもよい）

Ⅱ

次の(1)～(6)について説明しなさい。　　（配点：60 点）

(1) 会意文字

(2) 『爾雅』

(3) 声、韻、調

(4) 量詞

(5) 官話

(6) 結果補語

(1) 会意文字

【出題の意図】

中国語学の一般的専門用語に関する知識を問う。(1)は文字学、(2)は訓詁学、(3)は音韻学、(4)と(6)は現代語の文法、(5)は言語史に関する設問である。

【解答例】

(1)会意文字

「会意」とは漢字の造字法及び応用法として古くから知られる「六書」の一つで、既存の単体文字を、意味を表す構成要素として組み合わせ、新しい一つの文字を作り出す手法を言う。会意の原理に従って作られた漢字を会意文字という。例えば、「日」と「月」が組み合わさってできた「明」は会意文字である。

(2) 『爾雅』

語を意味によって配列・分析した辞典として、現存する中国最古の書。十三経の一つに数えられる。全十九篇で、初めの「釈詁」「釈言」「釈訓」の三篇から「訓詁」という言葉が生まれたことからもうかがえるように、訓詁学の祖とされる書物である。編者は不詳だが、漢代に儒者たちが編纂したものと考えられる。西晋の郭璞の注がある。

(3) 声、韻、調

中国語の音節を構成する三つの要素である声母、韻母、声調を言ったもの。声母は音節初頭子音である。韻母は、音節から声母を除いた残りの部分であり、更に介音、主母音、韻尾に分析される。声調は、音節全体にかぶさる高低の抑揚の型である。中国語の韻文は、古来、共通の響きを持つ韻母を適切な場所に配置する「押韻」や、声調型の配置ルール(声律)が厳格であった。

(4) 量詞

中国語の品詞の一つ。物の個数や動作の回数の単位として用いられる語のグループで、一般言語学的には、類別詞の一種であるとされる。物の個数の単位であるものは名量詞と呼ばれ、一方動作の回数の単位であるものは動量詞と呼ばれる。現代中国語の量詞は数詞の後ろに置かれて数量詞を構成し、名量詞の場合はその後ろに名詞を置き、動量詞の場合はその前に動詞を置く。

(5) 官話

中国語学において、「官話」という用語には一般に二つの意味がある。一つは明清時代に公的な場で用いられた口頭の広域通用語を指し、その言語的基礎は北方系の口語であると考えられる；もう一つは方言学の分類名であり、中国語の十大方言のうち最大の勢力を誇り、東南部を除く現代中国の広い地域に分布する方言群を指す。北京方言も官話方言に属する。

(6) 結果補語

現代中国語において、述語動詞の直後につき、動作・行為の結果を表す補語。結果補語になることができる成分は、多くの場合単音節の形容詞であるが、“清楚”(はっきりとした)のような二音節形容詞や、“懂”(わかる)のような少数の自動詞も結果補語になることができる。[動詞＋結果補語]を一つの複合動詞であるとする立場もある。